

無限抱擁

瀧井孝作著

無限擁

東京改造社版

昭和二年九月十八日印刷
昭和二年九月二十日發行

發 兌

一東京市麹町區內幸町
丁目三番地

改 造 社

振替東京一八四〇二番
電話銀座四一七三番
五〇四五六番

著 者
發 行 者
印 刷 者

龍 井 孝 作
山 本 美
椎 名 昇

東京市芝區田町十四番地

無 限 抱 擁
定 價 金 貳 圓

二 第 二 刷 所 刷 印

名著複刻全集 近代文学館 昭和44年9月

無
限
抱
擁

浅川驛よりトンネルもなくなり空は夜明であつた。

車室の窓ぎはで一人、信一は、靄の間から麥の穂の赤むで居る有様に向いて、

「もう麥が赤む」

と呟いた。麥畠は知らぬ間に色づいて居る。暫時心ひかれた。彼はまた

「戻つて來たなあ」

と自分に云うた。上の電氣の點つて居る、網棚に被り笠、糸立、岳樺の杖、(案内者が山刀で伐取り拵へて呉れた) 其が脇に置いてある。

彼は温泉で錆びた銀蓋の懷中時計を、セルの袴の上へ引出した。新宿へ到着す

でにまだ一時間の餘ある故、體は窓ぎはへもたれ彼は寢不足の頭を束ねた糸立へあし當てた。

浅い谷間の窓外に見える、東中野邊りで目が覺めた。車室に學生等が乗込んで居た。

信一は池袋までの切符故、新宿驛で降りて乗換をした。山の手電車の中で、彼の風變りの提げて居る笠が目立つた。

朝曇りの空だった。池袋の道の上を歩いて來、路端の新規に店出した小間物屋の前で、信一は齒みがきの類を買った。

何時もの雜司ヶ谷の友達の家は、空屋であつた。信一は其板戸の前で暫時へんな氣がした。目白驛の方角の引越先が貼紙に出て居た。

而して信一は復歩いて、尋ね當てた。

原中で平屋建で、友の古びた名札が門柱に掛けて有る。生垣内は三坪程の前栽

其處の雨戸は閉され、まだ寢て居る。

其住居は始めて信一は、起さずに一人門の前で立つて居た。信一は、盆櫓佇むで旅行の引續の甘い感傷に浸るのだつた。曇の空から雨の粒が落ちた。僅かに降出し、信一は笠を提げてイビで居た。

錢湯を思ひうかべた。一晚石炭殻を被つた氣持の惡るさ、草臥が錢湯でぬけるなれば、自身は色々の仕事のある體故、すぐ其にかゝれると思へた。彼は、歩き出した。

雨は本降りになり一時間程後、信一は戻つて來た。被り笠糸立で、湯上りの彼は汗ばむだ。著物の鎔仙の羽織に沁こんで居る、温泉の香がきつく匂つた。

門は未だ開かなかつた。

やがて、遅く起きた中田夫婦は、信一を内へ入れた。

彼は、雨水の笠と糸立は外へ寄かけ、上り口に袴を脱いで置いて、座敷へ入る

のであつた。

床の間を見て、一寸見てゐた。白日掩荆扉とある半折の出来榮が目についた。
中田が薄目で、眼鏡の玉をぬぐひつゝ來て坐つた故、彼は尋ねた。

「先生の字」

「六花さんダ。先生の處にころがつてゐたのを貰つてきた」

中田は同人の書の會に加らぬ人であつた。其趣味は厭だと云うて、連中を傍觀してゐたが、之を表装して居る處では、中田も何時か一步寄つて來て居た。

信一は自身の今朝新宿驛へ著いた由を云うた。先づ仕事の方を共にやつてをる雑誌の運びを尋ねた。

友は肯き、今日校了になる筈でもう僅だと答へた。信一に向き
「徳永君が心配して居た故、けふ逢ふと良い」

と云ふ。用向の話は其丈であつた。

例の女の方の話、兩方で口云はなかつた。

信一は具體的な考へができてない故曰へず、中田は取留のない心やりの聽手になれぬ故。

「飯にしようや」

年上の友は膝をもち上げた。

柱など節々の多い茶の間に、食卓は備つて居た。茶の間の隣の室には姿見などがある。(中田は西國の方のくろうとの女と二人暮しをして自分を立て貰き、三四年になる。今度は極く普通の借屋住居で、二人は平凡になつて落付いたのだ。)

信一は自分もやがて左うなる、自分の女との暮しを思ひ、茲の有様に氣注ぐのであつた。

丸髷のかづさんも坐つた。熱い飯で、やさ海苔、うに、味噌汁の菜で、常の通りである。茶湯臺の傍で、彼の旅先の土地の事柄が話題になつた。

かづさんも、彼の事情は知つて居て其を口云はなかつた。向合ひ面白くからかふには餘り重たい男だし、また道筋を漸と通つた自分共夫婦故、いゝ加減は曰へなかつた。

「やみさうもないナ」

信一は縁側へ起つて、空を見た。

「出掛けるかナ」

「うむ」

玄關でかづさんは彼の持物は

「預つて置きましよ」

と云つて、傘と足駄を揃へて居た。

左うして中田と連立つて出、信一は旅の引續の氣分は殆ど無かつた。

傳通院の前で、友と別れて彼は電車を降りた。××學寮で、恩人の徳永翁に逢

へる。それは商用で出て来て、國の子弟の居る學寮に泊る人であつた。

信一は昨年居た寄宿舎で、知合の學生に何氣ない顔で、廊下を通つた。

彼は徳永翁と差向ひになつた。彼は自分の話は田舎で打開け、翁は上京後訪談の方へあて手紙を寄越して居た。

「雜誌の方は、中田君ひとりのやうぢやつたから」

質實な翁は、仕事の方を心配してゐた。

「え、今逢つて話して來ました。これから印刷屋へゆく筈です」

彼の問題に付ては

「戻つて來たら、先生も自分らと共に話をしたいと云つて居られた」

「はあ」

「今晚、皆で飯でもたべてだと良いな」

と云ふ。信一はH師に何か云はれる覺悟で

「ぢや、根岸のH師の宅に来て頂きます」

と其場所を定めて云つた。徳永翁は肯いた。

十分餘り居て、信一は出掛けた。

路傍にある自働電話で、彼女へ戻つたこと云はうか稍迷つたが、今日は逢へぬ故と思ひ止つた。

例の神田の印刷所では、残り少い校正で二人居なくてもよいので、信一は又、根岸へと向ふのであつた。H師に何から話す考へは別になかつた。

(女とのゆきたてを左に雑とかく)

吉原の□屋に勤めて居る女——本名は松子——を二夕月前四月から見染て居るのである。

四月の十日に山谷で書の方の會合が、例會でなしに酒を飲む催しがあつた。席上友達じやうともだちの青舎せいしゃにこんな事を頼まれた。昨日家を出た儘で内へ工合悪いしこんな

飲むと又脱線して明日中田と約束してある旅行が出来ないかも分らぬ、信一君共に家へ来て明日旅立させて呉れないかね、と云ふ頼みであつた。信一は青舎の事情を知つてゐた故、氣の弱い友の用心棒になる事を承知した。其晩新聞記者のSと青舎と信一の三人は吉原へ廻りお茶屋へ上つた。信一は酒飲ではないが付合し明夕方まで青舎の連れであると思つた。青舎は其晩も歸り外れた。あくる日信一は青舎と中田との旅立を上野驛で見送つたが。

そんな鹽梅に青舎と共に出掛けて、用心棒の信一が却つて入つたのであつた。その朝、彼女に云はれた。

「お顔が、昨晚と異つて居りますワ」

友の青舎は十日程の旅行から戻つた。信一は入谷の宅へ出向き友と顔を合せた。旅行の土産話は胸をおどらせた。汽車の窓で見た向ふ山板谷峠邊の残雪の感じ。山の肌に残雪が川と云ふ字に消残り素的な書の線に見えた話。又羽後の酒田には

佛頂和尚の書のある話。某家の古い美事な座敷造りの話。こんどの總選舉で或人に一夜土地の遊廓を奢られて、翌日政談演説をした話。

而して旅して氣持の動いた故で、かなり捉はれない句作の出來た喜悅。其はこの頃信一も同じ故ノートを見せて喜び合つた。

信一は自身も話が溜つてゐた。□屋へあれから三度、と事を云つて「樹木か何か搖さぶられて居る様な」自分の心持を訴へるのであつた。

聞いて青舎は、其が戀だらうね君に其芽生が出たんだねとわく／＼した。結婚生活と云ふ話まで出ると、青舎は背かなんだか、しかし彼女の年齢―彼の二つ下の二十二才―を尋ねたりした。

其晩中田もやつて來て三人で淺草の方を歩いた。信一が相手の女の氣持を掛念してゐる事を曰つたら、中田は

「相手は石塊で、瓦の片でもよいよ、自身が燃えて居れば何時か動く」

と中田の場合、女は後で動いた例を持出した。それから

「□屋では、女の居る場所は悪いね、やり難いね。君は思ひ斷るかかまはず突進するか、二タ途だ」

とズカ〜と云ふ。又

「これならと思ふ女はさう無いから、好きな女が見當ればとるのだが」續けて又「金があるかね、一ト月程居續して飽きがこなかつたら立派な者故、女房にするんだがね」

と、中田はあすこで五六日も居續せうものなら退屈で叶はない其經驗談を持出した。

足は何時か吉原へ入り例の茶屋へ上つた。仲之町の一番外れにある茶屋だつた。魚河岸××の若主人時分の青舎を見知る藝者が居て青舎は顔がきいた。女中頭のお千代に信一の事を何かと頼んだり、青舎はその晩彼の女を見る心組であつ

たが

「大店はシンミリしない。□屋は厭やだ」

中田は持前を云うて肯かず、彼一人送られて往つた。(女と逢ふ情景は後に書く)

或日信一は青舎と雑司ヶ谷の中田の宅へ出掛た。もう五月に入つて居た。雑司ヶ谷で、青舎は來がけ電車の中で見かけた女の話云ひ出した。信一は引取つて「眞向ひに腰掛けてゐた、佛像のやうな顔の娘さんでしよ」

と云うて又

「窓口から、頸すぢへ日が射込んでゐた故、僕はうしろの鐵扉を閉めて上げやうかと思つた」

「まあ、信一さんは」

と、茲の細君は聞いて左う挿んだ。信一は之まで女などに目もくれない木強漢